〔書評と紹介〕

八木光則著『古代蝦夷社会の成立』

福田　友之

本書は、同成社刊の考古学シリーズ「ものが語る歴史」の二十一冊目として刊行されたもので、扱っている時代は、おもに古墳時代の六世紀から奈良時代の八世紀までである。本書の構成はつぎのとおりである。

序章　古代蝦夷研究の成果と視点
1　蝦夷社会の成立に関する研究成果と課題
2　蝦夷社会成立についてのテーマ
第一章　蝦夷社会成立への胎動
第一節　蝦夷社会成立までの東北北部社会
1　弥生時代の東北
2　「続縄文」後半期の文化
3　古墳文化の中の「続縄文」的要素
4　プロト蝦夷文化
第二節　古墳文化の進出と前方後円墳体制からの乖離
1　王権との交流
2　前方後円墳体制からの乖離
第三節　蝦夷社会成立への胎動
1　蝦夷概念成立前の東北と北海道
2　蝦夷概念と王権の意図
第二章　蝦夷社会の集落と墓制
第一節　古代蝦夷集落
1　古代蝦夷集落の成立
2　東北北部の古代集落の分析
3　東北北部の集落の特徴的事例
第二節　末期古墳
1　末期古墳の研究史
2　末期古墳の構造と分類
3　末期古墳の変遷と出自
第三節　蝦夷社会の集落と墓制
1　集落からみた蝦夷社会
2　東北北部における末期古墳出現と画期
第三章　末期古墳副葬品からみた蝦夷社会の交流
第一節　馬具と武具・武器
1　馬具・武具・装身具
2　鉄刀
3　蕨手刀
第二節　和同開珎と銙帯
1　和同開珎
2　銙帯
第三節　末期古墳の副葬品

1　副葬品の時期差と系譜論
2　東国との交流による七世紀型副葬品
3　朝貢饗給による八世紀型副葬品
4　城柵支配と九世紀型副葬品

第四章　北海道における擦文文化の成立

第一節　石狩低地帯と渡島半島における擦文文化の成立
1　古代渡嶋の歴史的背景
2　蝦夷社会成立以後の交流
3　渡島半島の自然環境と土師器

第二節　北海道における擦文文化の成立
1　土師器文化の導入
2　東北北部との交流

終章　蝦夷社会の成立
1　蝦夷社会の成立過程
2　蝦夷社会の地域性
3　蝦夷社会の特質

以上が本書の構成と内容であり、章節と項目をすべて紹介したので、これを見ただけでも本書の内容や著者の意図するところが理解されるが、このなかで、とくに興味深く読んだ部分を中心に紹介したい。

まず序章では、蝦夷（えみし）社会の成立に関する研究成果と課題として、近年の古代蝦夷研究を概観し、その成果と課題を民族論、成立過程論、蝦夷呼称論、移住者論、社会構造論の論点ごとにまとめたあと、蝦夷社会の成立について、その過程、蝦夷社会の地域性・構造に関する三つのテーマを取り上げ、蝦夷の性格を明らかにすることが本書の主題であるとしている。

第一章の蝦夷社会成立への胎動では、蝦夷社会成立以前の社会として、東北地方の弥生～古墳時代について述べている。この内容は既に考古学のほうではほぼ一般化した考えであるが、弥生前期・中期にみられる地域差は、後期になると失われ、土器型式で言えば天王山式土器群に斉一化される現象がみられる。集落や住居は後期には小型化し、さらに、前・中期に東北地方北部まで広がった水田耕作も、それ以降は衰退化したことを述べ、その背景には気候の冷涼化があったことを述べている。

さて、弥生前・中期の東北地方北部には、北海道南部を中心に展開した稲作農耕を行わない文化、すなわち続縄文文化の前半期の影響をうけた土器文化が展開し、弥生後期から四世紀の古墳時代にかけては、続縄文文化後半期の土器が東北地方南部の仙台平野にも南下し、盛岡以南ではヤマト王権側の土器である土師器とともに出土している。しかし、古墳時代中期の五、六世紀になると、その土器文化は東北地方北部に縮小されていく。続縄文後半期には、住居跡は発見されず、もっぱら墓のみが発見され、しかも生業としての農耕は行われなくなり、北海道と似通った文化形態であった。著者は、このような文化を東北地方南部以南の古墳文化と比較して、のちに蝦夷文化の原形となることから、従来の続縄文文化とは違う新たな概念を用いる必要があるとして、「プロト蝦夷文化」と仮称している。

東北地方南部では、四世紀ごろに大規模な前方後円墳が造られ始め、

五世紀後半から六世紀初頭にかけて北進するが、その後仙台平野では集落数が減少する。前方後円墳は造られなくなり、円墳なども小型化し、ヤマト王権との結びつきが薄くなり、それとの乖離が進んでいく。その結果、前方後円墳の造営と国造制の実施は阿武隈川流域以南に限定されてくることから、六世紀には、「蝦夷概念」が成立し、仙台平野以北の人びとが、王権外に住む蝦夷と蔑称されるようになったとしている。

第二章の蝦夷社会の集落と墓制では、まず、東北地方北部の古墳時代以降の古代集落について述べている。四世紀以降の住居跡が空白であったこの地域では、五世紀後葉の八戸市田向遺跡などの集落を経て、六世紀末～八世紀初頭には古代集落が成立しているが、この時期から古代末の十一世紀までの集落を、土器様式によって①期（六世紀末～七世紀前葉）、②期（七世紀中葉）、③期（七世紀後葉～八世紀前葉）、④期（八世紀中葉～後葉）、⑤期（八世紀末葉～九世紀前半）、⑥期（九世紀後半）、⑦期（十世紀前葉～中葉）、⑧期（十世紀後葉～十一世紀）の八期に分類し、時期ごとの竪穴住居跡数の増減、住居規模の変遷、住居における玉類や鉄器の保有、かまど位置の変化という視点から分析を行っている。そして、住居跡数の増減では、④・⑤期を谷にして、その前後に増加の山が見られる点を指摘した。この分析視点の提示は、東北地方各地で発掘調査に従事する者にとって、きわめて有用になろう。

また、東北地方北部から北海道にかけては、古墳時代末期から平安時代にかけて造られた、終末期古墳や末期古墳と言われる円墳の群集墳が知られているが、ついで、この研究史について述べたあと、その分布と年代、遺体を埋葬した古墳主体部の構造分類・規模・地域差と時期差、墳丘規模、周湟墓への移行について述べ、末期古墳の分類と変遷について、第一期（成立期、六世紀末～七世紀前葉で集落①期に相当）、第二期（拡大期、七世紀中葉～八世紀中葉で集落②～③期に相当）、第三期（転換期、八世紀前葉～後葉で集落③期後半～④期主体）、第四期（拡散期、八世紀後葉～十世紀前葉で集落⑤～⑦期）に区分したあと、各時期の古墳の分布・副葬品の内容、さらに、北海道の末期古墳（いわゆる北海道式古墳。第二期以降）や末期古墳群の出自と変化についても述べ、最後にこのような蝦夷社会の集落と墓制についてまとめている。

第三章の末期古墳副葬品からみた蝦夷社会の交流では、東北地方北部出土の副葬品として、まず馬具について述べ、鐙・轡・杏葉・帯金具があるとし、鐙では壺鐙、帯金具では鉸具の分類、ついで武具・武器では、武具の冑、甲の分類、環状金属製品について述べている。

さて、このなかの武器であるが、柄頭に装飾をもつ各種の装飾大刀、装飾をもたない直刀、柄頭が早蕨に似た形状をもつ蕨手刀について述べ、装飾大刀では圭頭・方頭大刀について、鞘尻金具・足金具等によって分類・編年を行っている。そして、刃長が五十～八十八センチと長いものが多いなかで、刃長二十二～四十三センチと短く、しかも幅広の方頭大刀は、出土地が北海道・東北地方北部に限定されることから、「北の方頭」と略称し、その生産地を上野国の可能性を考えている。

また、蕨手刀には、とくに多くのページを割いている。蕨手刀は、岩手県に多くの出土例が知られており、既に石井昌国著の『蕨手刀』（一九六六年）の大著があるが、著者は、その所論とそれ以降の研究史から述べ、蕨手刀の分類・編年・分布と地域性・伝播と性格について、私見

をまじえて述べている。分類は柄頭・足金具の形態を中心に行い、その特徴によって、蕨手刀の変遷を四期に分けて説明している。すなわち、一期は七世紀後葉～八世紀前葉、二期は八世紀前葉、三期は八世紀中葉～後葉、四期は九世紀で、二期に全国的に展開し、三期に東日本に盛行したとしている。そして、その生産は群馬・長野県あたりで開始され、伝播は東山道ルートによったとしている。

また、副葬品として出土する和同開珎と銙帯（かたい）についても述べ、和同開珎が畿内では四千二百点近い出土数があるのに対し、東北地方では末期古墳から大半が出土してはいるが、わずか三十九点ときわめて少ないことから、東北地方では貨幣として流通したのではなく、もっぱら有力者の威信財として古墳に副葬されたとしている。銙帯は、官人の身分表象として着装された腰帯（ベルト）の装飾品で、銅製の銙帯金具や石製の銙帯具が東北地方から出土する。銅銙は八世紀代の末期古墳や城柵官衙跡から出土し、末期古墳ではほとんどが主体部から出土するのに対し、石銙は九～十世紀に用いられ、城柵官衙跡や集落跡、とくに一般集落跡からの出土例が急増しており、しかも多くが単品であることなどから、その性格は当初の養老衣服令に則った位階制を示す下賜品であったものが、東北地方などの地方では、必ずしも衣服令に則った下賜ではないものに変わってきている可能性も考えられるとしている。

そして最後に、これらの末期古墳の副葬品についてまとめ、その時期差と系譜論については、各種ある副葬品のなかで、衝角付冑、鐙、轡、銀・錫製の釧、銀環、金銅製の馬具、北の方頭、刃長二尺以上の大刀などの七世紀型副葬品、銅銙、和同開珎、刃長二尺以下の方頭共鉄柄刀、蕨手刀などの八世紀型、ほとんどが周溝出土で墓前祭祀品とみられる土師器坏・須恵器長頸瓶などの九世紀型が認められるとした。そして、七世紀型の器財の大半は東国からの移入品であり、東北地方北部との馬匹調達を中心とした交易の結果であるとしている。また、八世紀型の銅銙、和同開珎は蝦夷と畿内との朝貢・饗給関係によって平城京からもたらされ、蕨手刀は上野国などの東国から東山道経由でもたらされたとしている。また九世紀には、銅銙は消滅し石銙に移行しているが、これは上京朝貢から城柵朝貢への転換とほぼ同じ時期であったとしている。

第四章の北海道における擦文文化の成立では、その成立を、土器が続縄文土器から擦文土器へ変わり、四世紀ぶりに竪穴住居を構えるようになった七世紀後葉、すなわち渡嶋蝦夷の時代とし、その形成については、本州からの大規模な移民によるものではなく、在地社会の自立的な発展とし、その契機として八戸地域と北海道石狩低地帯南部のシコツ地域との交流・交易の拡大があったからであるとしている。

そして、終章では、蝦夷社会の成立には国家による対蝦夷政策が密接に関わっていたことや蝦夷社会にみられた地域性など、これまで各章で述べてきたことをあらためてまとめ、蝦夷社会の階層は、集落構造や末期古墳のありかたから、家長や村長層が一般の集落成員と区別される社会であったとしたうえで、文化人類学で言われる首長制の段階にはいたっておらず、部族制の段階で階層社会を形成していたとしている。

以上が本書の概要である。つぎに本書への私見を述べてみたい。『記紀』に見られる「蝦夷」はヤマト王権によって、当時東北地方に住んでいた人々の集団に対して用いられた呼称であるが、この方面の研究は、

これまでもっぱら文献史学の立場に立って、考古学資料を援用して述べたもの、または考古学の立場であっても、考古学資料は限定的に用い、多くを文献史料によって述べたものであったが、本書は、古代蝦夷社会の中心と言っていい盛岡市の埋蔵文化財担当職員として、日常的に接する古代の遺跡や遺物の研究をもとに多くの資料を駆使し、古代蝦夷の社会の成立過程を描き出したもので、まさに在地考古学研究者の蝦夷研究書であるという点が大きな特色であろう。

本書から、古代蝦夷社会の成立という日本古代史上の大きなテーマについて、東北地方北部から北海道南部にかけての集落遺跡・古墳資料等の考古資料を丹念に収集・分類し、豊富な図・表とともに、その過程を具体的に描き出そうという著者の意図はじゅうぶんくみ取ることができるもので、この分野が専門外である評者にとっても非常に参考になり、また興味をもって読まさせていただいた。著者の本書執筆に払われたご努力に対して敬意をはらいたいと思う。

ところで、本書に関して気がついた点について述べさせていただくと、登場する各種の出土遺物名・遺構名、多数の遺跡名、さらに人名などには、本書の性格上いたしかたないが、難読か所が各所に見られる。本シリーズでは、漢字にルビをふることは、あまりなされていないようであるが、難読漢字が多いのは、読み手にとっては取っつきにくく、また理解を妨げるものである。とくに第三章に出てくる、末期古墳出土の馬具や武具関連では、馬具の銙帯（かたい）、鉸具（かこ）、武具の鉄刀の頭椎（かぶつち）大刀や鵐目（しとどめ）、帯金具の鉈尾（だび）などはなかなか読めないであろう。また、遺跡名でもとくに北海道の亦稚、茂漁、対雁などのアイヌ語地名由来の遺跡を、それぞれマタワッカ、モイザリ、ツイシカリと読める読者は何人いるであろうか。難読か所には、多少の繁雑さはあるとしても、ぜひルビをふって欲しかったと思う。また、二六頁の図6及び二二七頁の図56のキャプションは、各図の内容と齟齬が感じられるので、一考を要すべきであろう。このほか、校正ミスと思われるものがある。三一頁の秋田県出来島産、秋田県男鹿・深浦各地は、それぞれ青森県出来島産、秋田県男鹿、青森県深浦各地であり、一五五頁の図37の下2点の出土地も、丹後平5号墳は22号墳、同22号墳は5号墳と入れ替えるべきものであろう。さらに、第四章の北海道における擦文文化の成立では、擦文土器の実測図が示されていないのが惜しまれる。考古学・埋蔵文化財関係者であれば、擦文土器や擦文文化については、ある程度は理解できるであろうが、それとは直接関わっていない文献史学関係者や一般読者にとっては、なかなか擦文文化のイメージを描きにくいと思う。

あえて細かい点をあげれば、以上のような点もあるわけであるが、本書の価値を下げるものではない。本書は、古代蝦夷社会の成立過程、古代蝦夷像を、考古学研究者の立場から描き出したある意味での野心的な著作であり、古代蝦夷のみならず、北海道・東北地方の古代史・考古学の研究者、さらには埋蔵文化財関係のかたにはぜひ一読を勧めたい一冊である。

（A5判、二八八頁、二〇一〇年八月、同成社、価格六〇〇〇円＋税）

（ふくだ・ともゆき　元青森県立郷土館副館長）